

高度医療の病院に入院する子どもたちと遊んで30年 ～夜と霧を抱きしめながら～¹

坂上和子

私は東京都北区にある“星美ホーム”という児童養護施設で育ちました。10歳から19歳までお世話になって卒業後上智社会福祉専門学校（社専）に入り、3年間保育を学びました。その時に後でお話させていただく霜山徳爾先生に出会いました。

社専を卒業後、1977年から2003年までは新宿区の職員として保育園や障害児通所訓練施設、子ども家庭支援センターなど、子どもの発達に関わる仕事をしていました。

遊びのボランティアは1991年に高度医療の病院で立ち上げました。当時私は36歳でした。2000年に大きな転機があり、離婚をし、翌年46歳で明治学院大に入学して、「NPO法人病気の子ども支援ネット遊びのボランティア」を立ち上げました。

遊びのボランティアは設立して32年になります。目的の一つは子どもの遊ぶ権利を守ること。もうひとつは付き添いのお母さん達に respite（小休止）を提供するということです。原則毎週土曜日に訪問していますが、ニーズの高いお子さんには平日にも個別で訪問をしてきました。子どもと遊ぶ時間は90分間とし、その時間はお母さんが買い物したりちょっと一息つける時間になっています。

私は“人・モノ・金”を調達し動かしているコーディネーター役をしております。

プレイルームのほか、個室から出られないお子さんたちがいらっしやる個室にも入っていきます。子どもたちに呼ばればクリーンルームやICUにも入っていきます。写真のようなガウンを着てマスクをして帽子を頭に被っています。これはコロナでずいぶん見かけている風景だと思えますが私たちはコロナ前から感染予防の教育を受けてこの格好で病室に入っています。

